



科学を文化に

—サイエンスアゴラ・シンポジウムの記録—

金澤一郎，毛利 衛，他 著

本書は、日本学術会議“科学と社会委員会 科学力増進分科会”（以後“科学力増進分科会”と略す）が2006～10年にかけて開催した5回のシンポジウムの記録である。



載録された5回のシンポジウムは、いずれもサイエンスアゴラというイベント中の1セッションとして開かれた。サイエンスアゴラとは、科学コミュニケーションの促進を図るために、2006年から毎年11月に、東京お台場の日本科学未来館とその周辺施設で開催されているイベントである。日本学術会議も共催機関に名を連ねている。

サイエンスアゴラに関して、評者は2006年の初回から企画面に関与し、2009年からは運営面でも関与してきた。また同年より、科学力増進分科会委員でもある。したがって本書に関しては部内者ではあるが、逆に本書誕生の背景を知る立場にもある。

科学コミュニケーションとは、「難しいから」「自分には関係ないから」と敬遠されがちな科学と社会との溝を埋めるための活動及びその活動理念をいう。基本的なところでは科学の専門家と一般市民との対話の促進が大きな目標だが、とにかく敬遠されがちな科学を身近に引き寄せることも主眼の1つであ

る。“科学を文化に”というスローガンはその路線上にある。

その意味で、2006年の第1回シンポジウムに小松左京氏が登壇しているのは象徴的である。不朽の名作『日本沈没』の再映画化という絶好のタイミングでの登場だったが、偉大なSF作家であると同時に、大阪万博・文化人サロンなどの異分野交流を仕掛ける有能なプロデューサーでもあった同氏は、正にサイエンスコミュニケーターの先駆けといつてよい存在だろう。

この第1回を受けて、それ以降の“サイエンスアゴラ・シンポジウム”は、その年ごとの社会問題なども反映させつつ、科学と社会との関係においてメディアが果たす役割、疑似科学への対応、教育問題、科学リテラシーの共有へとテーマを展開させた。ここでいう科学リテラシーとは、“科学を活用して賢く生きるための知恵”という意味である。

一般にシンポジウムの欠点は、その場限りの議論で終わってしまうことにある。しかし過去5回の“サイエンスアゴラ・シンポジウム”が本書に集成されたことで、そこでの議論が継続され発展した軌跡を広く共有できるのは有意義なことであり喜ばしいことだ。各シンポジウムでの議論は示唆に富むだけになおさらである。多くの人に手に取ってほしい1冊である。

さてそれで、科学は文化になり得るのだろうか。評者の意見では、科学に対する“特別視”がなくなり、ラーメンの食べくらべをするくらいの軽さ（あるいは真剣さ？）で科学が話題になるのが理想である。ただし人々の舌が肥えれば、まずいラーメン店にはつぶれる。それと同じで、科学コミュニケーションでは科学の専門家の覚悟も問われる。それでもそうした緊張関係があつてこそ、持続可能な知識基盤社会の実現につながると信じたい。

(渡辺政隆 筑波大学サイエンスコミュニケーター/教授)

(A5判 207頁，定価本体1,890円，(財)日本学術協力財団，☎03-5410-0242，2011年)